

# 『ヒポクラテス集典 Corpus Hippocraticum』

坂井 建雄

順天堂大学保健医療学部

ヒポクラテス Hippocrates (BC460-370) は、伝説に彩られた古代ギリシャの医師である。エーゲ海のコス島で生まれて当代最高の医師とみなされ、一族と弟子の医師たちを数多く育てた。『ヒポクラテス集典』はヒポクラテスと弟子たちによる文書を集めた著作集で、18世紀に至るまで西洋伝統医学に少なからぬ影響を与えた。ヒポクラテスの名は、西洋医学の父として広く知られている。

## 『ヒポクラテス集典』

『ヒポクラテス集典』には70編あまりの医学文書が収められている。

とくに有名な文書は「誓い jusiurandum」である。現在の医療倫理では4つの原則（①自律の尊重、②無危害、③善行、④正義）が強調されるが、そのうちの②~④が、すでに「誓い」で述べられている。

「患者の利益になることを考え、危害を加えたり不正を行う目的で治療することはいたしません。……すべては患者の利益になることを考え、どんな意図的不正も害悪も加えません。……およそ口外すべきでないものは、それを秘密事項と考え、口を閉ざすことにいたします。」(大槻マミ太郎訳)<sup>1)</sup>

「神聖病について de morbo sacro」は、神がかりの病気と信じられていた癲癇性の疾患についての論考である。宗教的な説明を排した合理的な視点が高く評価されている。

「この病気は、他の病気とくらべて何ら神祕的でもなければ神聖でもないと私には思われる。こ

の病気も他の病気と同じように自然を原因とし、そこから生じるのである。……実際、この病気は他の非常に重い病気と同様に脳が原因である。」(石渡隆司訳)<sup>1)</sup>

「箴言 aphorismi」は病気と治療について医師の心得となるエッセンスを、簡潔な言葉で述べた語録集である。古くから注目されて、18世紀までの西洋伝統医学で学習すべき最重要の書物とされていた。全体が7章に分けられ、412篇の箴言が書かれている。第1篇はとくに印象的で、きわめてよく引用される。

「人生は短く、術のみちは長い。機会は逸し易く、試みは失敗すること多く、判断は難しい。医師は自らがその本分をつくすだけでなく、患者にも看護人にもそれぞれのなすべきことをするようにさせ、環境もとのえなければならぬ。」(石渡隆司訳)<sup>1)</sup>

『ヒポクラテス集典』を読みたければ、大槻真一郎編によるすぐれた日本語訳(1997)<sup>1)</sup>がある。長年のヒポクラテス研究の成果を踏まえて訳文も読みやすく、とくに第3巻の索引が充実して有用である。さらに深く知りたい人にはロエブ古典文庫版(1923-2018)<sup>2)</sup>の英語訳とフランスの大学によるフランス語訳(2003-2020)<sup>3)</sup>があり、いずれも最新の研究に基づくギリシャ語原典の校訂版と対訳になっている。これら3種類の現代語訳を比べて見ると、訳語のずれや解釈の揺らぎが見られ、古代と現代の間で医学の用語を対応させて概念を理解する困難さが読み取れる。クレイク博士による要約書(2015)<sup>4)</sup>は、第一人者の研究の集大

成で『ヒポクラテス集典』を概観するのに最適である。

紀元前4世紀にまで遡る『ヒポクラテス集典』の文書は、どのように書かれ、どのように編纂され、どのように現在まで伝わってきたのだろうか。ヒポクラテスの時代の文書は、パピルス紙の上に書かれ、巻物の形で保管されていた。しかしこのパピルスの卷子本のヒポクラテス文書は見いだされておらず、その原初の形を知ることはできない。4世紀頃から羊皮紙に文書を書き写し、本の形状に製本された冊子本が登場する。現存するヒポクラテスの写本はこの形で伝わっている。その後、印刷技術の登場と普及によって、16世紀から『ヒポクラテス集典』が印刷出版されるようになった。ギリシャ語原典としては1526年にヴェネツィアのアルドゥスが出版したのが最初で、17世紀までに8版が出版されている。そのうち2版がギリシャ語テキストのみ（ヴェネツィア 1526；バーゼル 1538）、6版がラテン語との対訳（ヴェネ

ツィア 1588；フランクフルト 1595, 1621, 1624；ジュネーヴ 1657；ライデン 1665）である。

私の所蔵本は、フランクフルトで1621年に出版されたもので、ギリシャ語とラテン語との対訳である<sup>5)</sup>。白いベラム（子牛皮紙）で装丁されたフォリオ判（高さ38cm）の大型本で、前付け（6葉）、本体1344頁、後付け（24葉）からなる。本文は2段組で、左段にギリシャ語、右段にラテン語訳が併記されている。本文は8節に分けられていて、58編の文書を含んでいる。末尾に2世紀の医師ソラノスによるヒポクラテスの伝記が収録されている。

扉頁の右の余白に“a Louis Odier D. M. / offert a Monsieur le Docteur / Mayor, par J(ean) L(ouis) Odier / en 7bre 1827”と書き込みがある。この本がかつてジュネーヴの医師ルイ・オディエ（1748–1817）の蔵書であり、没後に別の医師に贈られたものであるようだ。

<b>第1節</b>	22 心臓について	<b>第6節</b>
1 誓い	23 腺について	43 診療所内において
2 法（医の身分）	24 骨の自然性について	44 骨折について
3 術について	25 空気、水、場所について	45 関節について
4 古来の医術について	26 体内風気について	46 梃子の原理を応用した整復法
5 医師について	27 神聖病について	47 損傷について
6 品位について	<b>第4節</b>	48 痔瘻について
7 医師の心得	28 健康時の摂生法について	49 痔について
<b>第2節</b>	29 食餌法について	50 頭部の損傷について
8 子後	30 夢について	51 胎児の切断除去について
9 体液について	31 栄養について	52 解剖について
10 分利について	32 急性病の摂生法について	<b>第7節</b>
11 分利の日について	33 人体の部位について	53 流行病、第1-7巻
12 予言、第1-2巻	34 液体の利用法について	54 箴言
13 ヌス学派の子後	<b>第5節</b>	<b>第8節</b>
<b>第3節</b>	35 疾病について、第1-4巻	55 書簡集（書簡）
14 人間の自然性について	36 疾患について	56 書簡集（アテナイ人の決議）
15 生殖について	37 内科疾患について	57 書簡集（祭壇演説）
16 子供の自然性について	38 処女の病について	58 書簡集（テッサロスによる特使としての演説）
17 肉質について	39 婦人の自然性について	ソラノスによるヒポクラテス伝
18 七ヶ月児について	40 婦人病、第1-2巻	
19 八ヶ月児について	41 不妊症について	
20 重複妊娠について	42 視覚について	
21 歯牙発生について		



図 1 『ヒポクラテス集典』(1621)。坂井建雄蔵。

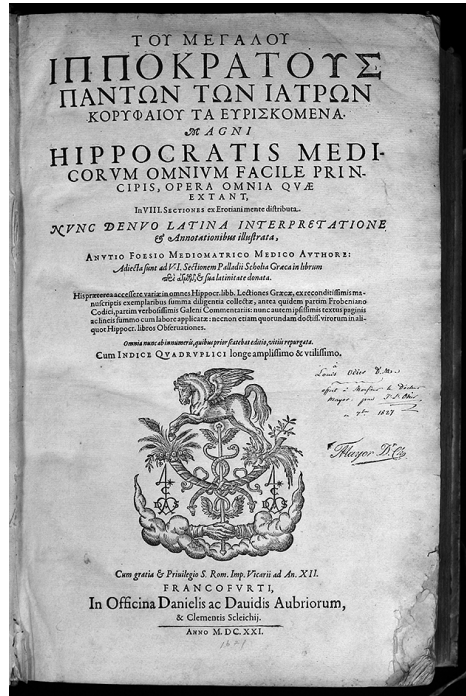


図 2 『ヒポクラテス集典』(1621)，扉。坂井建雄蔵。

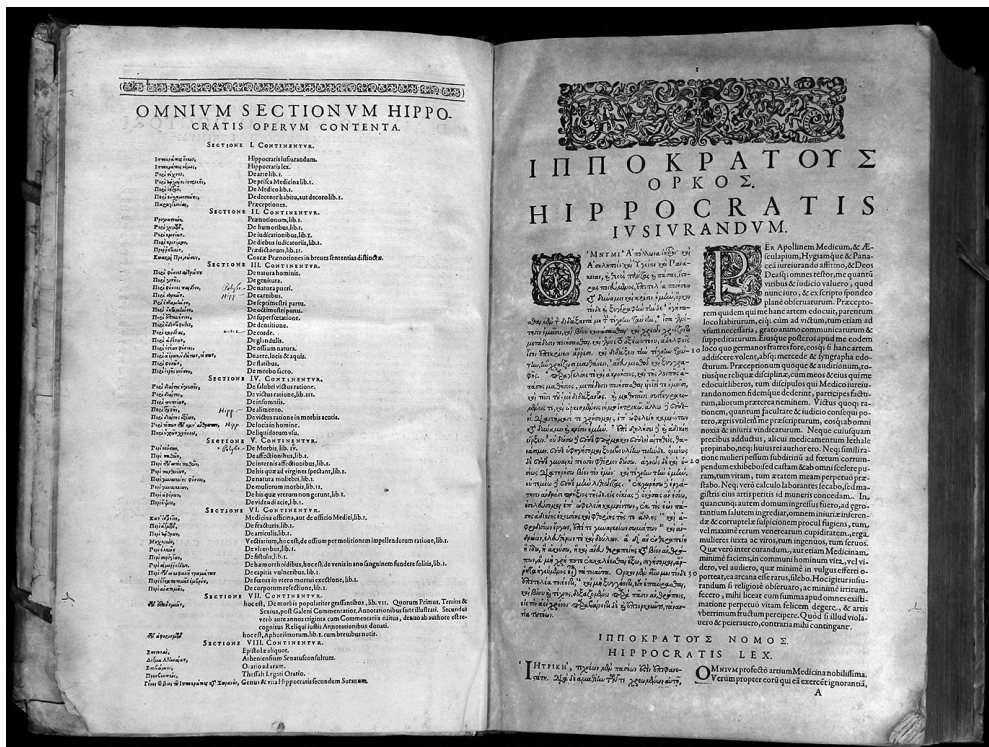


図 3 『ヒポクラテス集典』(1621)，目次と第 1 頁「誓い」。坂井建雄蔵。

## ヒポクラテスの生涯

ヒポクラテスは紀元前4世紀の同時代から医師としてすでに著明な人物であった。プラトンの『プロタゴラス』では医師の代表者としてヒポクラテスの名が挙げられており、アリストテレスの『政治学』ではヒポクラテスは身体の大きさではなく医師として大きな人物だと紹介されている。2世紀のソラノスがヒポクラテスについての最初期の伝記を書いており、これと『ヒポクラテス集典』の文書の記述が、ヒポクラテスの生涯についての重要な情報源となっている。フランスのジュアンナによるヒポクラテスの評伝(1999)<sup>6)</sup>は、ヒポクラテス研究の第一人者のものだけあり、奥深くかつ有益である。

ヒポクラテスの生まれたコス島は、エーゲ海の東南部でトルコの海岸に近いギリシャの島である。医学の神であるアスクレピオスの子孫でコス島に定住したとされる貴族の家系である。父親のヘラクレイデスはペルシャ戦争に参加した。妻の名前は不明であるが、2人の息子のテッサロスとドラコンはどちらも医師で、娘は弟子のポリュポスの妻になった。ヒポクラテスは人生の前半を生地のコス島で過ごし、医師として有名になった。その後トラキアのアブデラに呼ばれて哲学者のデモクリトスを治療し、またペルシャのアルタクセルクセス1世から手紙で招かれたが断っている。後半生は祖先の故地であるテッサリア地方で過ごし、息子や弟子たちとともに各地で患者を治療し、ラリッサで亡くなった。

コス島は東西が40キロ、南北が8キロほどで、トルコに近い北東の端に中心都市のコスがある。コスの街中にはプラタナスの古木があり、この木の下でヒポクラテスが弟子に医学を教えたと言いつたえられる。また郊外の山麓にはアスクレピオンの遺跡があり、ヒポクラテスはここで医学の知識を授けられたと言いつたえられる。しかし考古学的な知見から、コスもアスクレピオンもヒポクラテスの時代以後に建設されたことが分かっている。ヒポクラテスの時代のコス島の町は島の南西端の山上(現在のケファロス)の場所にあり、む

しろこちらがヒポクラテスの生地ではないかと考えられる。

## ヒポクラテスの影響と名声

ヒポクラテスの名声はすでに古代から高かった。古代ローマの1世紀のケルススは『医学』の中で医学の歴史について語り、ヒポクラテスは学識と弁証の才に長け、医学を哲学から独立させることに貢献したと述べている。2世紀のガレノスはヒポクラテスを、プラトンやアリストテレスと並ぶ偉大な人物として称え、ヒポクラテスの言葉をよく引用し、著作の注釈書を数多く著している。しかし古代医学の伝統はローマ帝国の滅亡とともに、ヨーロッパ世界からはいったん見失われてしまった。

古代ギリシャ・ローマの医学はその後アラビアに伝えられ、シリア語やアラビア語に翻訳された。その中心となったのはガレノスの医学書であり、それらを基にしてアヴィケンナの『医学典範』など新たな医学書が編纂された。ヒポクラテスの医学書は10編ほどのみが正典として重視され、いずれもガレノスによる注釈を通して知られたものであった。

10世紀後半の南イタリアにサレルノ医学校が、弟子を育てる医師たちの緩やかな共同体として成立した。早期(11世紀末まで)には古代から伝承した医学文書をもとに医学実地書が編まれ、またアラビア語の医学文書がラテン語に翻訳され、医学教材集『アルティチェラ Articella』が編まれた。その中核となる7編の文書の中に、ヒポクラテスの『箴言』、『予後』、『急性病の摂生法』の3編が含まれている。『アルティチェラ』はその後、ヨーロッパ各国の大学でも広く医学教育に用いられ、ヒポクラテスの文書の存在も広く知られるようになった。

16世紀後半には、ヒポクラテスとガレノスが古代の医師の中でとりわけ尊敬を集めていた。フランスの外科医パレはフランス語で外科の著作を著し、それを集大成した『著作集』の1579年版では、2人の肖像を掲載して、偉大なヒポクラテスが名前と栄光を有し、ガレノスがそれに次ぐと述



図4 ヒポクラテス(左)とガレノス(右)の肖像。パレ『著作集』(1664)<sup>7)</sup>から。坂井建雄蔵。

べている。

17世紀末のイギリスのシデナムは、ガレノスなどの医学理論を重視する当時の医学に対して、ヒポクラテスの医学に傾倒して臨床での観察を重視した。いくつもの著作を著して大きな反響を呼んだが、『医学的観察』(1676)では、ロンドンで自ら経験した疾患について治療法を述べ、伝染性疾患が天体や大気による影響を受けて型を変えるという流行素因の理論を主張した。18世紀初頭のライデン大学のプールハーフェは「ヒポクラテスの学習の勧め」と題する就任演説(1701)を行い、「ヒポクラテスの著作は忘れ去られているが、その詳細で入念な臨床観察は賞賛すべきである。それ以後の医学は推論や理論が中心になり退化した。臨床医学ではシデナムが賞賛される。理論の価値も認めるものの、臨床経験を取り入れることが必要であり、医学の学習はヒポクラテスを学ぶことから始めるべきである。」という趣旨を述べ、シデナムを「イギリスのヒポクラテス」と呼んで賞賛した。

江戸時代の日本の医学は中国医学をもとにした漢方医学が主流であったが、長崎のオランダ通詞たちや商館医たちを通じて徐々に西洋の外科が伝

えられ、とくにオランダ語の解剖学書を翻訳した『解体新書』(1774)を契機にオランダ語を通じた西洋の学問・文化・技術の研究すなわち蘭学が盛んになった。西洋医学の父であるヒポクラテスの肖像が、蘭方医学のシンボルとしてよく描かれた<sup>8)</sup>。

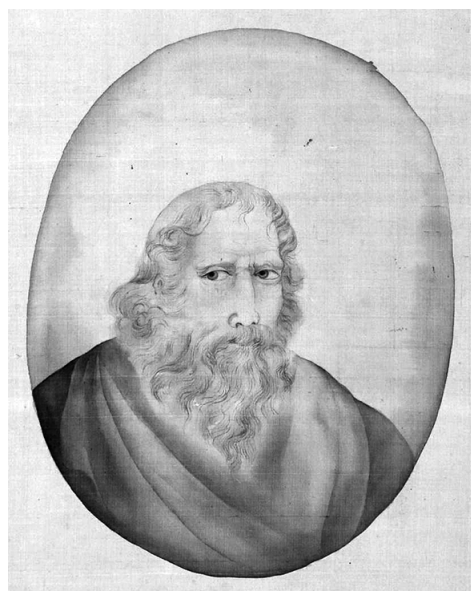


図5 桂川甫賢によるヒポクラテス像(1816)。早稲田大学蔵。

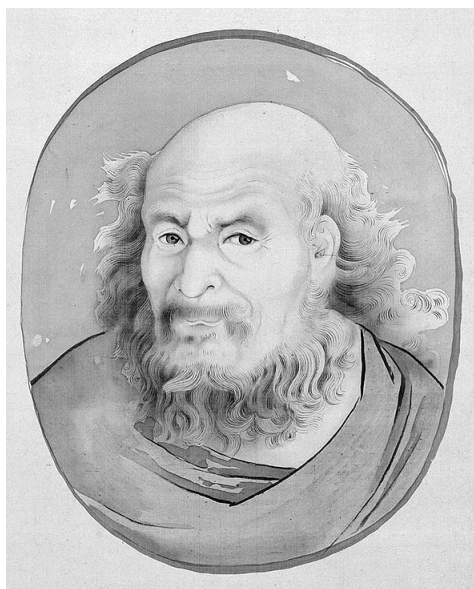


図6 渡辺崋山によるヒポクラテス像(1840)。九州国立博物館蔵。

## 文献

- 1) 大槻真一郎(編)：新訂ヒポクラテス全集。全3巻，エンタプライズ，1997。
- 2) Hippocrates: Hippocrates, with an English translation. (The Loeb classical library, 147-149, 472-473, 477, 482, 509, 520, 538). Harvard University Press, 1923-2018.
- 3) Hippocrates: Oeuvres completes (Collection des Universites de France serie Grecque). Paris: Les Belles Lettres, 2003-2020.
- 4) Craik EM: The 'Hippocratic' corpus: content and context. Abingdon: Routledge, 2014.
- 5) Hippocrates: TA EYPIΣKOMENA ... Opera omnia quae extant in VIII. sectiones ex Erotiani mente distributa. Nunc denuo Latina interpretatione & annotationibus illustrata, Anutio Foesio ... author: adjecta sunt ad VI. sectionem Palladii scholia Graeca inlibrum Peri agmon, & sua Latinitate donata [a Jacobo Santalbino] His praeterea accessere variae in omnes Hippocr. libb. lectiones Graecae, ex reconditissimis manuscriptis exemplaribus ... collectae, antea quidem partim Frobeniano codici, partim verbosissimis Galeni commentariis: nunc autem ipsissimis textus paginis ac lineis ... applicatae: necnon etiam quorundam doctiss. virorum in aliquot Hippocr. libros observationes. Omnia nunc ab innumeris, quibus prior scatebat editio, vitiis regurgata. Francofurti, In officina Danielis ac Davidis Aubriorum & Clementis Scleichii, 1621.
- 6) Jouanna J; DeBevoise MB (tr): Hippocrates. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1999.
- 7) Paré, A: Les oeuvres d'Ambroise Paré. 12<sup>th</sup> ed. Lyon, Jean Gregoire, 1664.
- 8) 緒方富雄：日本におけるヒポクラテス賛美：日本のヒポクラテス画像と賛の研究序説。日本医事新報社，1971。